

離島における民家の空間構成と 望ましい住まいの在り方 —鹿児島県口永良部島を対象として—

慶応義塾大学大学院 政策・メディア研究科
松原弘典研究室 正木 和美

1. 過疎化、2. 離島、3. 民家の実測調査、4. 島の暮らし

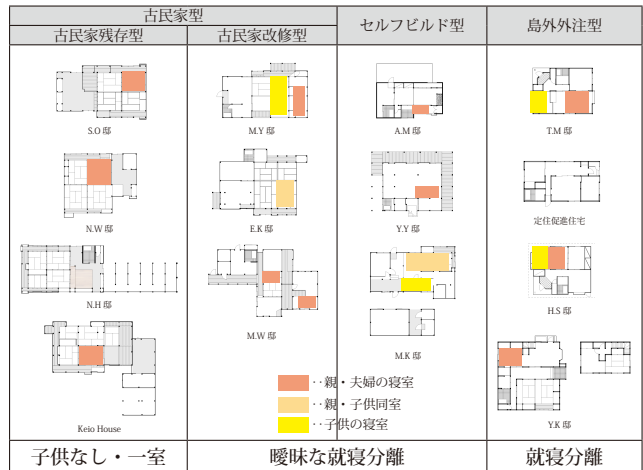
論文要旨

今日、地方における過疎化は進行し続けており、それら過疎地域の中でも特に危機的状況にあるのが、離島である。現在多くの離島では、少子高齢化や互助機能の低下が進み、冠婚葬祭や消防団など社会機能を維持することが困難であると共に、商店街の衰退、医療機関の縮小、学校の廃校など社会資本の喪失が進行している。今後、どのように離島へ移住者を増やすかが火急の課題である。一方、離島には限られた資源と交通によって育まれた独自の生活文化や人間関係がある。本研究の対象地である鹿児島県口永良部島においても、豊かな資源を利用した独自の居住文化があり、島民が互いに協力しながら民家建設を行い、建設行為が暮らしの一部となっている。本研究では、島の居住とライフスタイルを明らかにすることにより、望ましい住まいとはどのようなものか指針を示すことを目的とする。今後更なる人口減少及び過疎化が予想される中で、離島は日本の人口減少の縮図であり、本研究は、他の過疎地域における同問題を解決する糸口にもなると考えられる。

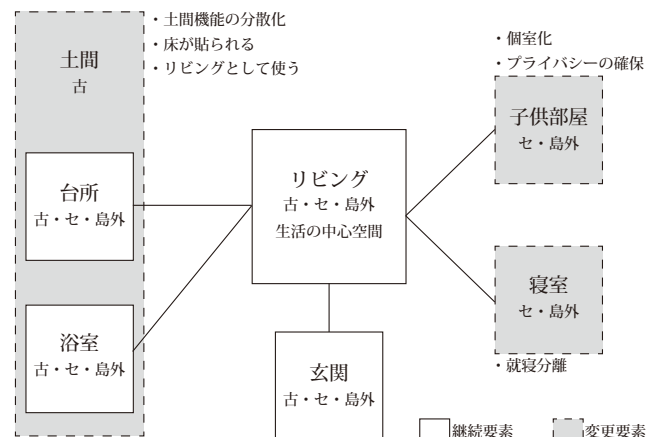
本修士論文は、序論(第1章)、本論(第2章、第3章、第4章)、結論(第5章)より構成される。序論では、日本における離島過疎問題、及び定住促進住宅の現状を概観し、本研究の目的と意義、既往研究と本研究の位置付けについて述べた。

続く本論では、第2章において、実測調査を行った14民家と民家に対する意識調査の分析を行った。その結果、島では民家を自ら補修・改修することを、生活の一部として捉えていることが分かった。第3章では、実測調査で得られた平面図を元に、空間構成の分析、類型化を行った。その結果、島の民家は、古民家型、セルフビルド型、島外外注型に分類でき、玄関とリビングのが連続する空間構成が、内と外の繋がりを強くし、コミュニティ形成に寄与していた。第4章では、平・断面図から生活用品を読み取り、その種類、使われ方を検証することで島のライフスタイルを明らかにした。その結果、冷蔵庫・ストッカーを2台以上所有していること、梁が収納として使われていること、などが分かった。

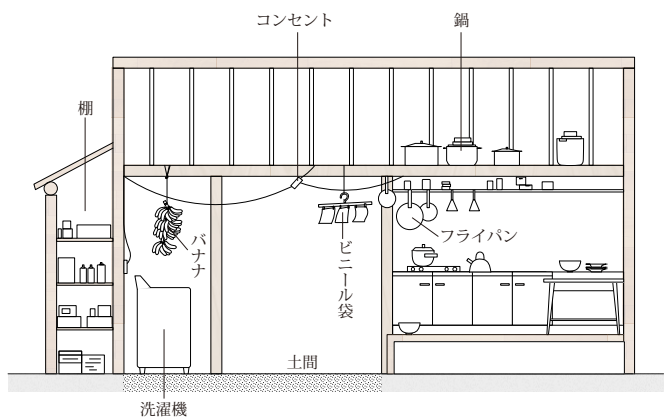
結論では、口永良部島における望ましい住まいの在り方として、建設、性能、空間構成、機能の4つの観点から指針を示した。そして、今後は島の生活やライフスタイルに寄り添った形で建築設計が行われるべきであると結論付けた。



第3章 寝室の空間構成の比較



第3章 小括 民家平面の継続要素と変更要素のダイアグラム



第4章 古民家残存型 梁の収納 (S.O 邸)